

第6章 児童生徒をのばす学習指導

1 授業づくりの基本

(1) よりよい授業の創造

ア よりよい授業とは

授業とは、教科等の指導を通して、児童生徒に知識や技能を習得させるとともに、思考力、判断力、表現力等を育むための営みであり、よりよい授業を行うためには、教員が児童生徒の実態把握に努め、学習のねらいを明確にし、教材研究を十分に行うことが重要である。RESEARCH（課題把握）、PLAN（計画）、DO（実践）、CHECK（評価）、ACTION（改善）のサイクルに沿って、授業の「ねらいが達成されたか」、「教材が適切であったか」、「手立てが効果的であったか」などを評価しながら、常に工夫・改善に努めることが重要である。

また、教員の深い児童生徒理解に基づく児童生徒との人間関係づくりや、児童生徒が互いに学び合う雰囲気づくりなど、学級経営が授業の重要な基盤となることは言うまでもない。



イ 児童生徒の視点に立った教材研究や指導方法の工夫

教材研究では、教員が児童生徒一人一人の学習状況を適切に把握し、その実態や発達の段階を踏まえて教材について考察し、個に応じた指導の工夫や時間の確保等をしていくことが大切である。

教材について考察する

- 既習の知識を活用して新しい問題を解決したり、新しい知識を既習の知識と関連付けたりするために、教材の系統性を整理しておく。
- 単元の基礎的・基本的な内容を押さえ、その教材で児童生徒に身に付けさせたいことは何かという指導のねらいを明確にしておく。
- 基礎的・基本的な内容は、児童生徒が主体的に活動する中で獲得させていくことが望ましいが、教えるべき事項は教員が適切に教えることも必要である。

学習形態を検討する

- 付けたい力を踏まえ、学習内容や集団の人数によって、一斉学習、個別学習、協働学習など効果的な学習形態を検討する。
- 児童生徒が、自らの課題を意識し、進んで学習しようとする態度を育てるために適切な学習形態を検討する。



導入を工夫する

導入には、単元全体の導入と1時間の授業の導入とがある。どちらも学習のねらいを明確にしたり、児童生徒に学習への動機付けをして主体的に取り組むようにしたりするために、大切な段階といえる。

工夫の観点例

- ・身近な事例と結び付ける。
- ・前時の学習内容と関連付ける。
- ・知的好奇心をくすぐる。

工夫の方法例

- ・大きな写真や実物などを用意する。
- ・実験や体験、ゲームなどの活動を設定する。
- ・複数の教員のロールプレイで提示する。
- ・ICTを効果的に活用する。

教具の活用を検討する

- ICT機器等の教具については、期待される学習効果を明確にして、適切に活用することが大切である。



発問、予想される反応と手立てを検討する

- 児童生徒が自ら課題を見付け、考え、判断、表現し、よりよく解決することができるように、どの場面で何をどのように考えさせればよいか、どのように活動させればよいか、どのようなことを身に付けさせればよいかなど、単元全体の具体的な計画や1時間ごとの展開を考える。
- 1時間の授業においては、教員の発問や指示の内容、児童生徒の予想される反応とそれに対する具体的な手立てを、あらかじめ想定しておく。
- 発問は、児童生徒が教材について思考することを促したり、理解を深めさせたりする働きをもつ。発問の内容は、指導のねらいとの関係で決定されるので、意図や目的を明確にする。

「深い学び」につながる発問の条件

- ① 具体的で分かりやすい。
- ② 言い換えや繰り返しを必要としない。
- ③ 一問多答になる。
- ④ 児童生徒の多様な考えを引き出す。

板書計画を検討する

板書は、前述の発問と関連付けながら、全ての児童生徒にとって授業の流れや内容が分かるものとなるようにユニバーサルデザインの視点に立って工夫することが大切である。具体的には、「どの場面で」、「何を」、「どの位置に」、「どれぐらいの大きさで」、「何色のチョークで書くか」などが考えられる。



板書のポイント

- ① 学習課題や主要発問を書く。
- ② 児童生徒が、学習課題や思考の過程を振り返ることができるようにする。
- ③ 児童生徒が板書する機会を設ける。
- ④ 正しい筆順や仮名遣いで、誤字・脱字、略字がないようにする。
- ⑤ 読みやすい板書になるように、文字の大きさ等を工夫する。
- ⑥ 難しい漢字、間違いやすい漢字は、拡大して書く。
- ⑦ 学習課題に対するまとめを書く。

また、電子黒板は、事前に準備した教材や動画等の表示、画面上での書き込み、表示した内容の保存等といったパソコンの操作を電子黒板上で行うことができ、1人1台端末環境と併せて活用することで、児童生徒に、自分の端末で作成した資料を基に電子黒板上で拡大機能や書き込み機能を活用しながらプレゼンテーションをさせたり、自分の端末上のワークシート等を電子黒板に一覧で表示することで議論を深めさせたりすることができる。また、事前に板書データを作成しておくことで、授業中の板書の時間の短縮だけでなく、電子黒板上で板書データの重要な箇所に直接書き込むことで理解を促したり、書き込んだ板書データを児童生徒と共有し、事後の学習に活用することで学習内容の定着を図ったりすることができる。電子黒板を活用することは、児童生徒、教員どちらにもメリットがあり、電子黒板と通常の黒板の特質をそれぞれ踏まえた上で、板書計画を検討していくことが大切である。

ウ 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

各教科等の指導を通して、育成を目指す資質・能力である①知識及び技能の習得、②思考力、判断力、表現力等の育成、③学びに向かう力、人間性等の涵養をバランスよく実現するために、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を進めることが重要である。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の具体的な内容については、次の三つの視点に立った授業改善を行い、これらの視点の具体的な内容を手掛かりに、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学びを続けるようにすることが求められている。

- (ア) 学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- (イ) 子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。
- (ウ) 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」は、新しい知識や技能を既にもっている知識や技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかという視点をもったりするために重要なものである。このような「見方・考え方」を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要である。

(2) 学習指導案の作成

学習指導案は、教材研究を通して具体化した「児童生徒観」「教材（題材）観」「指導観」に基づく指導と評価の計画などを整理しまとめたもので、いわば授業を行うための計画書であり、シナリオである。

授業についてできるだけ多角的な視点からイメージをもち準備をしておくことは、授業の成否の鍵となる。このような日々の教育活動の中で構想した授業のイメージを学習指導案に書き留めることにより、漠然と考えていたことが明確になり、指導のねらいや教材の本質的な理解、教材に対する児童生徒の学習状況などについての深い理解につながる。また、学習指導案を基に、よりよい授業の創造という視点に立って他の教員と議論し深め合うことにより、質の高い授業を後世に伝えていくことにもつながる。

○ 学習指導案の内容・形式

学習指導案の内容や形式には、本来定型はないが、何をねらいとして、どんな内容を、どのような方法と展開・過程で指導するのかを示すために、p.34の学習指導案例にあるような項目を挙げて作成するものである。教育研究所Webサイト内（下記URL参照）には各教科等の学習指導案例等を掲載している。

● 「先生の蔵（学習指導案、教材・教具）～奈良県の先生の授業を応援するための教材教具集～」

<http://www.e-net.nara.jp/kenkyo/index.cfm/16,0,64,html>



〇〇科学習指導案（例）

〇〇年〇〇月〇〇日〇曜日 〇校時
 〇年〇組〇〇名
 使用教室（ ）
 指導者 〇 〇 〇 〇

- 1 単元（教科等によっては、題材・主題などとする。）
- 2 指導について 〇 教材（題材）観（単元の内容、単元を取り上げる意義、今後の展開など）
 〇 児童（生徒）観
 〇 指導観（指導の力点、工夫、形態、その他配慮事項など）
- 3 単元の目標 { ・単元全体の指導を通じて児童生徒に身に付けさせたい力を、学習指導要領の目標、指導内容及び児童生徒の実態に基づき具体的に記述する。
 ・児童生徒の立場に立って、「～しようとする。」「～と考え、判断する。」「～できる。」「～を理解している。」「～を身に付ける。」などの表現で記述する。 }

4 単元の評価規準及び具体例

	知識・技能 学習指導要領の指導事項	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の 評価規準	「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所）」に記載されている「内容のまとめりごとの評価規準（例）」等を参考にする。		
お学習 評価活動 規具体に 準の	① ②	① ②	② ②
	学習指導要領解説や「評価規準（例）」等を参考に、目標に照らして学習の実現状況が判断できるよう指導場面を想定した児童生徒の具体的な姿を評価規準として作成する。		

※ 学習活動における具体的評価規準は、単元の全体計画（この例の場合「5 指導と評価の計画」）の中に示す場合もあります。

5 指導と評価の計画

時 間	ねらい、学習活動	単元の評価規準との関連	評価方法等
	※ 学習のねらいを児童生徒の立場で書く。 教科によっては、「小単元名」を書く。	知・技① など	・ワークシート等で確認する。 など

6 本時案

- (1) 本時の目標
- (2) 本時の評価規準
- (3) 本時の展開例

学習指導案は、それぞれの教員の授業の構想や計画を表したものです。この学習指導案例を参考に、工夫して作成しましょう。

学習活動	指導上の留意点	評価規準及び評価方法
※ 児童生徒の学習活動を流れに沿って児童生徒の立場で書く。 〈文末表現例〉 ～に気付く。 ～考える。 ～工夫する。 ～を知る。 ～を聞く。 ～を発表する。 ～をまとめる。 など	※ 児童生徒の学習活動を充実させるために必要な教員の指導の手立てについて具体的に書く。 〈文末表現例〉 ～できるよう、助言する。 ～できるよう、～する。 ～について確認する。 ～に配慮する。 ～言葉がけをする。 など	※ 評価の視点や評価方法について書く。 ※ 手立てを必要とする児童生徒への具体的な指導についても記述したい。 ※ 「4 単元の評価規準及び具体例」「5 指導と評価の計画」で示した評価規準と一致させる。

2 授業の実際



(1) 授業展開

ア 授業を展開するとは

授業の構想（学習指導案）に基づきながらも、授業におけるその時々の子童生徒の学習状況に応じてよりよく授業のねらいに到達するために、子童生徒の発言などにどのように対応するか、指導計画を変更するかどうか、変更する場合はどのように変更するのかといった判断を行いながら授業を進めることが大切である。また、これからの社会を生きていく上で求められる資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりを目指していく必要がある。

イ 子童生徒の学習状況を見取る

実際の授業において、事前の子童生徒の実態把握を踏まえつつ、その時々の子童生徒の状況を把握する必要がある。授業を展開する上で、子童生徒の学習状況を的確に見取ることは重要な要件の一つとなる。

子童生徒を見取る重要な視点

- 理解の状況・・・理解の程度はどのくらいか。
- 技能習得の状況・・・技能が身に付いているか。
- 思考の状況・・・自分なりに思考しているか。
- つまづきの状況・・・何につまづいているか。
- 学習意欲の状況・・・学習したいという気持ちをもっているか。

子童生徒の学習状況を見取る手立て

- 「発言やつぶやき」などから。
- 「観察したこと」から。
- 「単元テスト等の結果」から。
- 「ワークシートや学習プリントの記述内容等」から。

ウ 授業の展開に必要な手立て

(ア) 教員の話し方

話す・聞くことのプロに

子童生徒が思ったことを自由に発言できる雰囲気は、自然発生的にできるものではない。教員が意図的に作り上げるものである。教員が語りかけるときの言葉が、生き生きとして魅力的であれば、伝え合う喜びとその大切さを子童生徒は感じ取るだろう。また、子童生徒の発言を受け止める教員の「聞く力」が優れていれば、子童生徒は安心して自由に発言する喜びを感じ、よりよく伝えるための方法を考えようとするだろう。だからこそ、教員は、「話す・聞くことのプロ」でなければならない。優れた教員の話し方をはじめ、落語、漫才、語り、アナウンス、対話番組のインタビュー等を含め、優れた話し手の技術に学び、自らの資質・能力を高めるよう心がけたい。



発問・指示・助言のポイント

子童生徒が一生懸命発言した内容に対して、教員が「なるほど…。他には？」とすぐに次の発言を求めるといった場面を見かける。子童生徒の発言が教員が期待するものと異なるからだとすれば、発言した子童生徒はそのことを感じ取り、次の発言への意欲を失うことにつながりかねない。

発問によっては一つの答えを導き出すものと、多様な考えや感想を導き出すものがある。学習のねらいや子童生徒の実態に応じて、発問の仕方を工夫することが肝要である。そして、その問いに対して子童生徒がどのように反応するか、できるだけ多様に予想しておく

ことが大切である。さらに、それらの反応に対し評価と助言のポイントを用意しておくことが、「他には？」といった対応を防ぐことにつながる。

(イ) 板書の工夫

板書には、児童生徒の知的好奇心を刺激したり、思考や理解を深めたりする働きがある。板書の機能を十分に生かすとともに、効果的な学習が行えるよう、板書計画を立てておく。

板書の留意事項

発達段階に応じた板書

(小学校低学年)

- 平仮名・漢字・片仮名・数字を大きく、丁寧に、正しく書く。
- チョークの色は白色と黄色を基本に色の区別と使い分けを決めておく。
- 文字、図などの全体のバランスを考えて配置し、アクセントを付ける。
- 挿し絵、略画、線画などを入れ、児童の関心・意欲を引き出す。

(小学校中学年)

- 文字や数字、色やバランスに気を付ける。
- ネームプレートなどを利用し、児童の考えを公平に認めるようにする。
- 問題、方法、解決といった学習のつながりや思考の道筋がはっきりするように線や矢印を工夫する。

(小学校高学年)

- 問題、方法、解決の過程と思考の道筋が分かるように、線や矢印を工夫する。
- 考えの違いや対立点が視覚的に分かりやすいように、構成や表現を工夫する。
- 児童の板書や、板書を使った説明を取り入れて、考えを表現する場を増やす。

(中学校・高等学校)

- 「生徒に書き写させる」板書から「生徒に考えさせる」板書を心がける。
- 教材や目標に応じて板書内容を考え、問題解決の過程が分かるよう工夫する。
- 見やすい大きさの字、スピード、丁寧さ、分かりやすさを心がける。

(ウ) ノート指導

ノートの役割

- 児童生徒にとって、ノートは、学習活動の基本である。ノートに書くことによって、あいまいであった考えを明確にすることができる。また、学習の結果を積み重ねていくものでもある。ノートを見れば、授業の流れやそのときの自分の考えが分かるようにしておくことが大切である。
- 教員にとって、児童生徒のノートは、教員自身の授業内容の自己評価の材料になるものである。ノートを見ることによって学習理解の状況の評価することができる。
年度初めには、児童生徒にノートの取り方・使い方やその役割などについて、教科ごとに丁寧に指導しておくことが大切である。
ノートを点検して評価した結果は、補助簿などに記録するようにする。そういった記録の蓄積が、単元末などに行う観点別学習状況の評価の際の資料として役に立つ。

ノートの形式

学年や教科等によって、ノートの形式は違う。ノートの大きさ、マス目の大きさや行数など、適切なものを選ぶ必要がある。さらに、学年でノートの形式をそろえておくことは、学習指導の効率を高めるのに役立つ。年度初めに、学年主任や教科主任と相談して決めておく。

ノートの使い方

小学校低学年では、教員が板書したことを正確に書き写すことから始め、マス目や罫線の正しい使い方を指導する。学年が進むにつれて、次のようなことに気を付けてノートを使わせるようにする。



- 月・日・表題を入れて、何が書いてあるかがすぐ分かるようにする。
- 調べたことや考えたこと、更に分かったことや思ったことなどをまとめる。
- 家庭学習と授業での学習の部分を区別する。
- 授業のノートと計算練習や書き取り練習などのノートを分ける。
- 授業の内容を分かりやすく記録する。
- 色鉛筆やマーカーなどを利用し、見返したときに自分で分かるように工夫する。

エ 主体的・対話的な学びの一例

効果的な授業実践事例では、レポートの作成、プレゼンテーション（発表）、ディベート、ロールプレイ、反転学習、ラウンド・ロビン等、様々な方法がある。児童生徒に身に付けさせたい力を明確にし、指導方法を選んだり開発したりして、多様な視点をもって授業づくりに取り組むことが大切である。

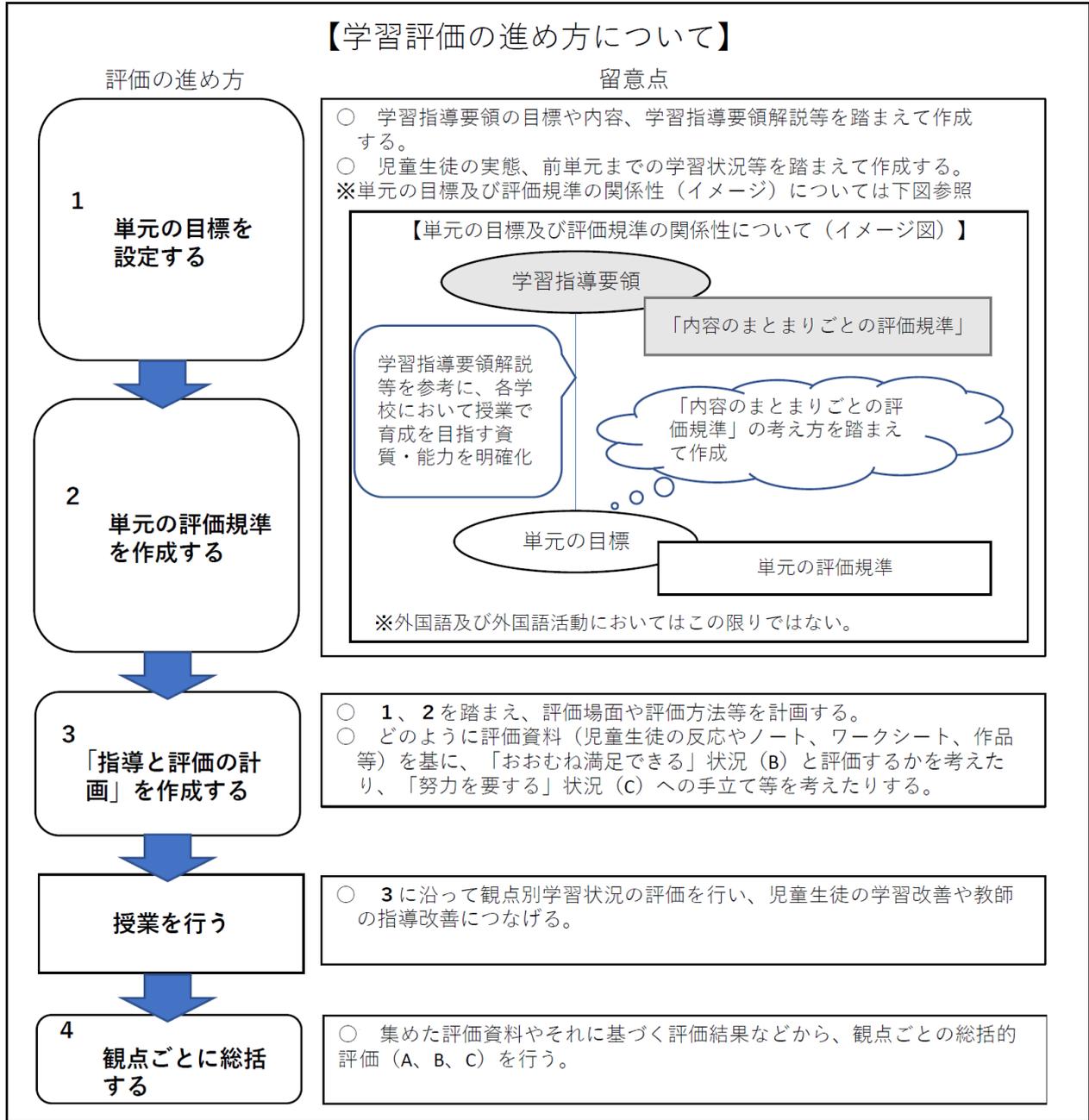
（代表的なグループ技法）

- Think-Pair-Share（自分の考えを明確にし、他者の意見と比較しながら考えを深めていくことができ、クラス全体で討論する際の準備にもなる。）
 - ① 教員が全体に問題（課題）を提示する。
 - ② 個々の児童生徒が自分の考えをもつ。
 - ③ （隣や向かいと）ペアで考えを発表する。
 - ④ 4～6人グループで意見を共有する（グループで教え合う）。
 - ⑤ クラス全体で共有する。
 - ⑥ 学んだことを振り返る。
- 知識構成型ジグソー法
 - ① 教員が全体に問題（課題）を提示する。この際の問題（課題）は、既存の知識の組合せや、三つ、四つの知識（知識A、知識B、知識C、・・・）を組み合わせることで解けるようなものに設定する。
（【課題の解決】＝「知識（資料）A」＋「知識（資料）B」＋「知識（資料）C」＋・・・）
 - ② 教員は、問題（課題）を解くための少人数のグループをつくる。
 - ③ 個々の児童生徒が、問題（課題）に対する自分の考えをもつ。
 - ④ グループのメンバーは知識（資料）A、知識（資料）B、知識（資料）C、・・・のいずれかの知識の習得に取り組む。その際、知識（資料）A、知識（資料）B、知識（資料）C、・・・、それぞれの知識（資料）を完全に習得するための新しいグループをつくり、それぞれの知識（資料）のスペシャリストになる。
 - ⑤ それぞれの知識（資料）のスペシャリストは、元のグループに戻り、グループで協力し、習得した「知識（資料）A」＋「知識（資料）B」＋「知識（資料）C」＋・・・を組み合わせ思考する活動（ジグソー活動）により、問題（課題）の解決に取り組む。
 - ⑥ 問題の解決をグループごとに発表し、クラスで様々な考え方を共有する。
 - ⑦ 学んだことを振り返る。

(2) 評価の進め方

学習評価は、学習指導要領の目標の実現状況を把握し指導の改善に生かすものである。

単元における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、下図のように進めることが考えられる。なお、複数の単元にわたって評価を行う場合など、下図の方法によらない事例もあることに留意する必要がある。



学習指導と学習評価のPDCAサイクル

学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することが重要。

指導と評価の一体化

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）

平成 28 年 12 月 21 日 中央教育審議会